

疑惑

芥川龍之介

青空文庫

今ではもう十年あまり以前になるが、ある年の春わたくしじつせんりん私は実践倫りかく理学の講義を依頼されて、その間あいだかれこれ一週間ばかり、岐阜ぎふ県下の大垣町へ滞在する事になった。元来地方有志なるものけんにおおがきまち
 難ありがた有迷惑な厚遇に辟易へきえきしていた私は、私を請待せいだいしてくれた
 ある教育家の団体へあらかじ予め断りの手紙を出して、送迎とか宴会とか
 あるいはまた名所の案内とか、そのほかいろいろ講演に附随する
 一切の無用な暇つぶしを拒絶したい旨希望して置いた。すると幸さいわい
 私の変人だと云う風評は夙つとにこの地方にも伝えられていたものと
 見えて、やがて私が向うへ行くと、その団体の会長たる大垣町長
 の幹旋あっせんによつて、万事がこの我儘な希望通り取計らわれたばか

りでなく、宿も特に普通の旅館を避けて、町内の素封家N氏の別荘とかになつてゐる閑静な住居すまいを周旋された。私がこれから話そうと思ふのは、その滞在中たいざいちゆうその別荘で偶然私が耳にしたある悲惨な出来事の顛末てんまつである。

その住居すまいのある所は、巨鹿城こらくじように近い廓町くわまちの最も俗塵に遠い一区劃だつた。殊に私の起臥きがしていた書院造りの八畳は、日当りこそ悪い憾うらみはあつたが、障子襖しょうじふすまもほどよく寂びのついた、いかにも落着きのある座敷だつた。私の世話を焼いてくれる別荘番の夫婦者は、格別用のない限り、いつも勝手に下つていたから、このうす暗い八畳の間まは大抵森閑として人氣ひとけがなかつた。それは御影みかげの手水鉢ちようずばちの上に枝を延ばしてゐる木蓮もくれんが、時々白い花を

落すのでさえ、明あきらかに聞き取れるような静かさだった。毎日午前だけ講演に行つた私は、午後と夜とをこの座敷で、はなはだ泰平に暮す事が出来た。が、同時にまた、参考書と着換えとを入れた靴のほかに何一つない私自身を、春寒く思う事も度々あつた。

もつとも午後は時折来る訪問客に気がまぎ紛れて、さほど寂しいとは思わなかつた。が、やがて竹の筒つつを台にした古風なランプに火がとも燈ると、人間らしい氣息いぶきの通う世界は、たちまちそのかすかな光に照される私の周囲だけに縮まってしまった。しかも私にはその周囲さえ、決して頼もしい気は起させなかつた。私の後うしろにある床とこの間まには、花も活いけてない青銅の瓶かめが一つ、威いかつくどつしりと据えてあつた。そうしてその上には怪しげな楊柳ようりゅう観音くわんおんの軸

が、煤すすけた錦きんらん欄らんの表ひょう装そうの中に朦もうろう朧ろうと墨ぼく色しよくを弁わじていた。私は折々書見の眼をあげて、この古ぼけた仏画をふり返ると、必ず炷たきもしない線香がどこかで勻におつているような心もちがした。それほど座敷の中には寺らしい閑寂の気が罩こもっていた。だから私はよく早寝をした。が、床にはいつても容易に眠くはならなかつた。雨戸の外では夜鳥よどりの声こゑが、遠えん近きんを定めず私を驚かした。その声はこの住居すまいの上にある天主閣てんしゆかくを心に描かせた。昼見るといっても天主閣は、翁鬱おううつとした松の間に三層さんぞうの白壁しらかべを畳みながら、その反そり返つた家根の空へ無数の鴉からすをばら撒まいている。――私はいつかうとうとと浅い眠に沈みながら、それでもまだ腹の底には水のような春寒はるさむが漂はっているのを意識した。

するとある夜の事——それは予定の講演日数が将に終ろうとして
 いる頃であつた。私はいつもの通りランプの前にあぐらをかいて、
 漫然と書見に耽ふけつていると、突然次の間との境の襖が無気味
 なほど静に明いた。その明いたのに気がついた時、無意識にあの
 別荘番を予期していた私は、折よく先刻書いて置いた端書の投とうか
 函んを頼もうと思つて、何気なくその方を一瞥した。するとその
 襖ふすまぎわ側わのうす暗がりには、私の全く見知らない四し十じゅう恰が好っこうの
 男おとこが一人、端然として坐つていた。実を云えばその瞬間、私は驚き
 愕おびや——と云うよりもむしろ迷信的な恐怖に近い一種の感情に
 脅おびやかされた。また實際その男は、それだけのシヨツクに価すべく、
 ぼんやりしたランプの光を浴びて、妙に幽霊じみた姿を具えてい

た。が、彼は私と顔を合わすと、昔風にりようひじ両 肱 を高く張つて恭しく頭を下げながら、思つたよりも若い声で、ほとんど機械的にこんな挨拶の言を述べた。

「夜中、殊に御忙しい所を御邪魔に上りまして、何とも申し訳の致しようはございませんが、ちと折入つて先生に御願ひ申しい儀がございまして、失礼をも顧ず、参上致したような次第でございませぬ。」

ようやく最初のショックから恢復した私は、その男がこう弁じ立てている間に、始めて落着いて相手を観察した。彼は額の広い、頬のこけた、年にも似合わず眼に働きのある、品の好い半白の人物だった。それが紋附でこそなかったが、見苦しからぬ羽織袴

で、しかも膝のあたりにはちやんと扇面を控えていた。ただ、咄と嗟つさの際にも私の神経を刺戟したのは、彼の左の手の指が一本欠けている事だった。私はふとそれに気がつく、我知らず眼をその手から外そらさないではいられなかった。

「何か御用ですか。」

私は読みかけた書物を閉じながら、無愛想にこう問いかけた。

云うまでもなく私には、彼の唐突な訪問が意外であると共に腹立しかつた。と同時にまた別荘番が一言いちごんもこの客きやく来くわいを取次がないのも不審だった。しかしその男は私の冷淡な言葉にもめげないで、もう一度額を畳につけると、相あいか不わ変ら朗ず読ろうどくでもしそうな

調子で、

「申し遅れましたが、私は中村玄道わたくしなかむらげんどうと申しますもので、やはり毎日先生の御講演を伺いに出て居りますが、勿論多数の中でございませうから、御見覚えもございませうまい。どうかこれを御縁にして、今後はまた何分ともよろしく御指導のほどを御願ひ致します。」

私はここに至つて、ようやくこの男の来意が呑みこめたような心もちがした。が、夜中書見やちゆうの清興せいきようを破られた事は、依然として不快に違いなかつた。

「すると——何か私の講演に質疑でもあると仰有おっしゃるのですか。」
 こう尋ねた私は内心ていひそかに、「質疑なら明みょう日にち講演場こうげんじやうで伺いませう。」と云う体の善い撃退の文句を用意していた。しか

し相手はやはり顔の筋肉一つ動かさないうで、じつと袴の膝の上に視線を落しながら、

「いえ、質疑ではございません。ございませんが、実は私一身のふり方につきまして、善悪とも先生の御意見を承りたいのでございます。と申しますのは、唯今からざつと二十年ばかり以前、私はある思いもよらない出来事に出合いました、その結果とんと私にも私自身がわからなくなってしまうました。つきましては、先生のような倫理学界の大家の御説を伺いましたら、自然分別もつこうと存じまして、今晚はわざわざ推参致したのでございます。いかがでございましょう。御退屈でも私の身の上話を一通り御聴き取り下さる訳には参りますまいか。」

私は答に躊躇ちゆうちゆうした。成程なるほど専門の上から云えば倫理学者には相違ないが、そうかと云つてまた私は、その専門の知識を運転させてすぐに当面の実際問題への靈活れいかつな解決を与え得るほど、融通の利きく頭腦の持ち主だとは遺憾ながら己惚うぬぼれる事が出来なかつた。すると彼は私の逡巡しゆんじゆんに早くも気がついたと見えて、今まで袴はかまの膝の上に伏せていた視線をあげると、半ば歎願するように、怯おず怯おず私の顔色かおいろを窺うかがいながら、前よりやや自然な声で、慇懃いんぎんにこう言葉を継ついだ。

「いえ、それも勿論強いて先生から、是非の御判断を伺わなくてはならないと申す訳ではございません。ただ、私がこの年になりますまで、始終頭を悩まさずにはいられなかつた問題でございま

すから、せめてその間の苦しみだけでも先生のような方の御耳に入れて、多少にもせよ私自身の心やりに致したいと思うのでございます。」

こう云われて見ると私は、義理にもこの見知らない男の話を聞かないと云う訳には行かなかつた。が、同時にまた不吉な予感と茫漠とした一種の責任感が、重苦しく私の心の上にのしかかつて来るような心もちもした。私はそれらの不安な感じを払い除きたい一心から、わざと気軽らしい態度を装^{よそお}って、うすぼんやりしたランプの向うに近々と相手を招じながら、

「ではとにかく御話だけ伺いましょう。もつともそれを伺ったからと云って、格別御参考になるような意見などは申し上げられる

かどうかわかりませんが。」

「いえ、ただ、御聞きになつてさえ下されば、それでもう私には本望すぎるくらいでございます。」

なかむらげんどう

中村玄道と名のつた人物は、指の一本足りない手に畳の上の扇子をとり上げると、時々そつと眼をあげて私よりもむしろ床の間の楊柳観音ようりゆうかんのんを偷み見ながら、やはり抑揚よくように乏しい陰気な調子で、とぎれ勝ちにこう話し始めた。

ちようど明治二十四年の事でございます。御承知の通り二十四年と申しますと、あの濃尾のうびの大地震おおじしんがございました年で、あれ以来この大垣おおがきもがらりと容子ようすが違つてしまいましたが、その頃町には小学校がちようど二つございまして、一つは藩侯の御建てになつたもの、一つは町方まちかたの建てたものと、こう分れて居つたものでございます。私はその藩侯の御建てになつたK小学校へ奉職して居りましたが、二三年前まえに県の師範学校を首席で卒業致しましたのと、その後また引き続いて校長などの信用も相当にございましたので、年輩のちにしては高級な十五円と云う月俸を頂戴致して居りました。唯今でこそ十五円の月給取は露命つなも繫げないぐらいでございましょうが、何分二十年も以前の事で、十分とは参

りませんまでも、暮しに不自由はございましたから、同僚の中でも私などは、どちらかと申すと羨望せんぼうの的になったほどでございました。

家族は天にも地にも妻一人で、それもまだ結婚してから、ようやく二年ばかりしか経たない頃でございました。妻は校長の遠縁のもので、幼い時に両親に別れてから私の所へ片づくまで、ずっと校長夫婦が娘のように面倒を見てくれた女でございます。名はさよ小夜と申しまして、私の口から申し上げますのも、異なものでございまして、至って素直な、はにかみ易い——その代りまた無口過ぎて、どこか影の薄いような、寂しい生れつきでございました。が、私には似たもの夫婦で、たといこれと申すほどの花々しい楽

しきはございませんでも、まず安らかなその日その日を、送る事が出来たのでございます。

するとあの^{おおじしん}大地震で、——忘れも致しません十月の二十八日、かれこれ午前七時頃でございましょうか。私が井戸端^{ぼた}で楊枝^{ようじ}を使っている、妻は台所で釜の飯を移している。——その上へ家がつぶれました。それがほんの一二分の間の事で、まるで大風のような^{すさ}凄まじい地鳴りが襲いかかったと思えますと、たちまちめきめきと家が傾^{かし}いで、後^{あと}はただ瓦の飛ぶのが見えたばかりでございませぬ。私はあつと云う暇^{ひま}もなく、やにわに落ちて来た^{ひさし}庇に敷かれて、しばらくは無我無中のまま、どこからともなく寄せて来る大震動の波に揺られて居りましたが、やっとその庇の下から土煙の

中へ這い出して見ますと、目の前にあるのは私の家の屋根で、しかも瓦の間に草の生えたのが、そっくり地の上へひしやげて居りました。

その時の私の心もちは、驚いたと申しましようか。慌あわてたと申しましようか。まるで放心したのも同前で、べつたりそこへ腰を抜いたなり、ちようど嵐の海のように右にも左にも屋根を落した家々の上へ眼をやつて、地鳴りの音、梁はりの落ちる音、樹木の折れる音、壁の崩れる音、それから幾千人もの人々が逃げ惑うのでございまいましよう、声とも音ともつかない響が騒然と煮えくり返るのをぼんやり聞いて居りました。が、それはほんの刹那せつなの間あいだで、やがて向うの底ひさしの下に動いているものを見つけますと、私は急に飛

び上つて、凶い夢からでも覚めたように意味のない大声を挙げながら、いきなりそこへ駈けつけました。庇の下には妻の小夜が、下半身を梁に圧おされながら、悶え苦しんで居ったのでございます。私は妻の手を執つて引張りました。妻の肩を押して起そうとしました。が、圧おしにかかった梁は、虫の這い出すほど動きませんでした。私はうろたえながら、庇の板を一枚一枚むしり取りました。取りながら、何度も妻に向つて「しつかりしろ。」と喚わめきました。妻を？ いやあるいは私自身を励ましていたのかも存じません。小夜は「苦しい。」と申しました。「どうかして下さいまし。」とも申しました。が、私に励まされるまでもなく、別人のように血相を変えて、必死に梁を擡もたげようと致して居りましたから、私

はその時妻の両手が、爪も見えないほど血にまみれて、震えながら梁をさぐつて居つたのが、今でもまざまざと苦しい記憶に残っているのでございます。

それが長い長い間の事でございます。——その内にふと気がつきますと、どこからか濛々とした黒煙くろけむりが一なだれに屋根を渡つて、むつと私の顔へ吹きつけました。と思うと、その煙の向うにけたたましく何か爆はぜる音がして、金粉きんぷんのような火粉ひのこがばらばらと疎まばらに空へ舞い上りました。私は氣の違つたように妻へ獅し噛がみつきました。そうしてもう一度無二無三むにむさんに、妻の体を梁の下から引きずり出そうと致しました。が、やはり妻の下半身いは一寸つすんも動かす事は出来ません。私はまた吹きつけて来る煙を浴び

て、庇に片膝つきながら、噛みつくように妻へ申しました。何を？ と御尋ねになるかも存じません、いや、必ず御尋ねになりましょう。しかし私も何を申したか、とんと覚えていないのでございます。ただ私はその時妻が、血にまみれた手で私の腕をつかみながら、「あなた。」と一言申したのを覚えて居ります。私は妻の顔を見つめました。あらゆる表情を失った、眼ばかり徒いたずらに大きく見開いている、気味の悪い顔でございます。すると今度は煙ばかりか、火の粉を煽った一陣の火気が、眼も眩くらむほど私を襲つて来ました。私はもう駄目だと思ひました。妻は生きながら火に焼かれて、死ぬのだと思ひました。生きながら？ 私は血だらけな妻の手を握ったまま、また何か喚わめきました。と、妻もまた繰返し

て、「あなた。」と一言申しました。私はその時その「あなた。」と云う言葉の中に、無数の意味、無数の感情を感じたのでございます。生きながら？　生きながら？　私は三度何か叫びました。それは「死ぬ。」と云ったようにも覚えて居ります。「己おれも死ぬ。」と云ったようにも覚えて居ります。が、何と云ったかわからない内に、私は手て当り次第、落ちて居る瓦を取り上げて、続けさまに妻の頭へ打ち下しました。

それから後のちの事は、先生の御察しにまかせるほかはございません。私は独り生き残りました。ほとんど町中を焼きつくした火と煙とに追われながら、小山のように路を塞ふさいだ家々の屋根の間をくぐって、ようやく危い一命を拾ったのでございます。幸か、そ

れともまた不幸か、私には何にもわかりませんでした。ただその夜、まだ燃えている火事の光を暗い空に望みながら、同僚の一人二人と一しよに、やはり一ひしぎにつぶされた学校の外の仮小屋で、炊き出しの握り飯を手にとった時とめどなく涙が流れた事は、未だにどうしても忘れられません。

中村 玄道なかむらげんどうはしばらく言葉を切つて、

臆おくびよう病びようらしい眼たまみを畳

へ落した。突然こんな話を聞かされた私も、いよいよ広い座敷の

春はる寒さむが襟元まで押寄せたような心もちがして、「成程なるほど」と云う元気さえ起らなかつた。

部屋の中には、ただ、ランプの油を吸い上げる音がした。それから机の上に載せた私の懐中時計が、細かく時を刻む音がした。と思うとまたその中で、床の間の楊柳ようりゆう観音くわんおん音が身動きをしたかと思うほど、かすかな吐息といきをつく音がした。

私は悸おびえた眼を挙げて、悄然と坐っている相手の姿を見守つた。吐息をしたのは彼だろうか。それとも私自身だろうか。——が、その疑問が解けない内に、中村玄道はやはり低い声で、徐おもむろに話を続け出した。

申すまでもなく私は、妻の最期を悲しみました。そればかりか、時としては、校長始め同僚から、親切な同情の言葉を受けて、人前も恥じず涙さえ流した事がございました。が、私があので震の中、妻を殺したと云う事だけは、妙に口へ出して云う事が出来なかつたのでございます。

「生きながら火に焼かれるよりはと思つて、私が手にかけて殺して来ました。」——これだけの事を口外したからと云つて、何も私が監獄へ送られる次第でもございませんまい。いや、むしろその

ために世間は一層私に同情してくれたのに相違ございません。それがどう云うものか、云おうとするとたちまち喉のどもと元にこびりついて、一言も舌が動かなくなってしまうのでございます。

当時の私はその原因が、全く私の臆病に根ざしているのだと思いました。が、実は単に臆病と云うよりも、もつと深い所に潜んでいる原因があつたのでございます。しかしその原因は、私に再婚の話が起つて、いよいよもう一度新生涯へはいろいろと云う間際までは、私自身にもわかりませんでした。そうしてそれがわかつた時、私はもう二度と人並の生活を送る資格のない、憐むべき精神上の敗残者になるよりほかはなかつたのでございます。

再婚の話私に持ち出したのは、小夜さよの親おやもと許もとになつていた校

長で、これが純粹に私のためを計った結果だと申す事は私にもよく呑み込めました。また實際その頃はもうあの大地震おおじしんがあつてから、かれこれ一年あまり経つた時分で、校長がこの問題を切り出した以前にも、内々同じような相談を持ちかけて私の口裏くちうらを引いて見るものが一度ならずあつたのでございます。所が校長の話を書いて見ますと、意外な事にはその縁談の相手と云うのが、唯今先生のいらつしやる、このN家の二番娘で、当時私が学校以外にも、時々出稽古でげいこの面倒を見てやつた尋常四年生の長男の姉だつたらうではございませんか。勿論私は一応辞退しました。第一教員の私と資産家のN家とでは格段に身分も違いますし、家庭教師と云う関係上、結婚までには何か曰いわくがあつたらうなどと、痛

くない腹を探られるのも面白くないと思つたからでございませう。
同時にまた私の進まなかつた理由の後には、去る者は日に疎して、
以前ほど悲しい記憶はなかつたまでも、私自身打ち殺した小夜の
面影が、箒星の尾のようにぼんやり纏わつていたのに相違ご
ざいませぬ。

が、校長は十分私の心もちを汲んでくれた上で、私くらいの年
輩の者が今後独身生活を続けるのは困難だと云う事、しかも今度
の縁談は先方から達つての所望だと云う事、校長自身が進んで
媒酌の勞を執る以上、悪評などが立つ謂われのないと云う事、
そのほか日頃私の希望している東京遊学のごときも、結婚した暁
には大いに便宜があるだろうと云う事——そう事をいろいろ並べ

立てて、根気よく私を説きました。こう云われて見ますと、私も無下むげには断つてしまう訳には参りません。そこへ相手の娘と申しますのは、評判の美人でございましたし、その上御恥しい次第ではございますが、N家の資産にも目がくれましたので、校長に勧められるのも度重なって参りますと、いつか「熟考して見ましよう。」が「いずれ年でも変りましたら。」などと、だんだん軟化致し始めました。そうしてその年の変った明治二十六年の初夏には、いよいよ秋になったら式を挙げると云う運びさえついてしまったのでございます。

するとその話が始まった頃から、妙に私は気が鬱うつして、自分ながら不思議に思うほど、何をするにも昔のような元気がなくなっ

てしまいました。たとえば学校へ参りましても、教員室の机に倚より懸かかりながら、ぼんやり何かに思い耽たつて、授業の開始を知らせる板木ばんぎの音さえ、聞き落おしてしまふような事が度々あるのでございます。その癖何が気になるのかと申しますと、それは私にもはつきりとは見極めをつける事が出来ません。ただ、頭の中の歯車がどこかしっくり合わないような——しかもそのしっくり合わない向うには、私の自覚を超越した秘密わだかまが蟠わだかまつていゝような、気味の悪い心もちがするのでございます。

それがぎつと二ふた月つきばかり続いてからの事でございますらう。

ちようど暑中休暇になつた当座で、ある夕方私が散歩かたがた、
ほんがんにべつじん
 本願寺別院の裏手にある本屋の店先を覗いて見ますと、その頃

評判の高かった風俗画報と申す雑誌が五六冊、夜窓鬼談やそうきだんや月耕げっこう漫画まんがなどと一しよに、石版刷の表紙を並べて居りました。そこで店先に佇たたずみながら、何気なくその風俗画報を一冊手にとつて見ますと、表紙に家が倒れたり火事が始つたりしている画があつて、そこへ二行に「明治廿四年十一月三十日発行、十月廿八日震災記聞」と大きく刷つてあるのでございます。それを見た時、私は急に胸がはずみ出しました。私の耳もどでは誰かが嬉しそうに嘲あざわ笑らいながら、「それだ。それだ。」と囁くような心もちささえ致します。私はまだ火をともしない店先の薄明りで、慌あわただしく表紙をはぐつて見ました。するとまつ先に一家の老ろうにやく若やくが、落ちて来た梁はりに打ちひしがれて惨死ざんしを遂げる画が出て居ります。それから

土地が二つに裂けて、足を過つた女子供を呑んでいる画が出て居ります。それから——一々数え立てるまでもございせんが、その時その風俗画報は、二年以前の大地震おおじしんの光景を再び私の眼の前へ展開してくれたのでございます。長良川ながらがわ鉄橋陥落の画、尾張わり紡績会社破壊の画、第三師団兵士屍体したいはつくつ発掘の画、愛知病院負傷者救護の画——そう云う凄惨な画は次から次と、あの呪わしい当時の記憶の中へ私を引きこんで参りました。私は眼がうるみました。体も震え始めました。苦痛とも歓喜ともつかない感情は、用捨ようしゃなく私の精神を蕩漾とうようさせてしまいます。そうして最後の一枚の画が私の眼の前に開かれた時——私は今でもその時の驚愕がありあり心に残って居ります。それは落ちて来た梁はりに腰を打た

れて、一人の女が無惨にも悶え苦しんでいる画でございました。その梁の横よこたわった向うには、黒煙くろけむりが濛々と巻き上つて、朱しゆを撥はじいた火の粉さえ乱れ飛んでいるではございませんか。これが私の妻でなくて誰でしょう。妻の最期でなくて何でしょう。私は危く風俗画報を手から落そうと致しました。危く声を挙げて叫ぼうと致しました。しかもその途端に一層私を悸おびえさせたのは、突然あたりが赤々と明あかるくなつて、火事を想わせるような煙の匂においがふんと鼻を打つた事でございます。私は強いて心を押し鎮めながら、風俗画報を下へ置いて、きよろきよろ店先を見廻しました。店先ではちようど小僧が吊つりランプへ火をとぼして、夕暗の流れている往来へ、まだ煙の立つ燐マツチ寸がら殻がらを捨てている所だったのでござい

ます。

それ以来、私は、前よりもさらに幽鬱な人間になってしまいました。今まで私を脅おびやかしたのはただ何とも知れない不安な心もちでございましたが、その後はある疑惑ぎわくが私の頭の中に蟠わだかまつて、日夜を問わず私を責め虐さいなむのでございます。と申しますのは、あの大地震おじしんの時私が妻を殺したのは、果して已やむを得なかつたのだらうか。——もう一層露骨に申しますと、私は妻を殺したのは、始から殺したい心があつて殺したのではなかつたらうか。大地震はただ私のために機会を与えたのではなかつたらうか。——こう云う疑惑でございました。私は勿論この疑惑の前に、何度思い切つて「否いな、否。」と答えた事だかわかりません。が、本屋の店先で

私の耳に「それだ。それだ。」と囁いた何物かは、その度にまた嘲笑あざわらつて、「では何故なぜお前は妻を殺した事を口外する事が出来なかつたのだ。」と、問い詰つめるのでございます。私はその事実には思い当ると、必ずぎくりと致しました。ああ、何故私は妻を殺したなら殺したと云い放てなかつたのでございましょう。何故今日きょうまでひた隠しに、それほどの恐しい経験を隠して居つたのでございましょう。

しかもその際私の記憶あざやかへ鮮あざやかに生き返つて来たものは、当時の私が妻の小夜さよを内心憎んでいたと云う、忌いまわしい事実でございませ。これは恥を御話しなければ、ちと御会得ごえとくが参らないかも存じませんが、妻は不幸にも肉体的に欠陥のある女でございました。（以

下八十二行省略) ……そこで私はその時までには、おぼつか覚束ないながら私の道德感情がともかくも勝利を博したものと信じて居つたのでございます。が、あの大地震のようなきようへん凶變が起つて、一切の社会的束縛が地上から姿を隠した時、どうしてそれと共に私の道德感情も亀裂きれつを生じなかつたと申せましょう。どうして私の利己心も火の手を揚げなかつたと申せましょう。私はここに立ち至つてやはり妻を殺したのは、殺すために殺したのではなかつたらうかと云う、疑惑を認めずには居られませんでした。私がいよいよ幽鬱ゆううつになつたのは、むしろ自然のすう数とでも申すべきものだったのでございます。

しかしまだ私には、「あの場合妻を殺さなかつたにしても、妻

は必ず火事のために焼け死んだのに相違ない。そうすれば何も妻を殺したのが、特に自分の罪悪だとは云われぬ筈だ。」と云う一条の血路がございました。所がある日、もう季節が真夏から残暑へ振り変つて、学校が始まつて居た頃でございませうが、私ども教員が一同教員室の卓テエブル子を囲んで、番茶を飲みながら、他たわい暖もない雑談を交して居りますと、どう云う時の拍子だったか、話題がまたあの二年以前の大地震に落ちた事がございませう。私はその時も独り口を噤つぶんだぎりどうりようで、同僚どうりようの話話をを聞くとともに聞き流して居りましたが、本願寺の別院の屋根が落ちた話、船ふなまち町の堤防が崩れた話、俵たわらまち町の往来の土が裂けた話——とそれからそれへ話話がはさみましたが、やがて一人の教員が申しますには、中な

かまち

町とかの備後屋びんごやと云う酒屋の女房は、一旦梁はりの下敷になつて、

身動きも碌ろくに出来なかつたのが、その内に火事が始つて、梁さいわいも幸

焼け折れたものだから、やつと命だけは拾つたと、こう云うので

ございます。私はそれを聞いた時に、俄にわかに目の前が暗くなつて、

そのまましばらくは呼吸さえも止るような心地が致しました。ま

た実際その間は、失心したも同様な姿だったのでございましょう。

ようやく我に返つて見ますと、同僚は急に私の顔色が変わつて、椅

子ごと倒れそうになつたのに驚きながら、皆私のまわりへ集つて、

水を飲ませるやら薬をくれるやら、大騒ぎを致して居りました。

が、私はその同僚に礼を云う余裕もないほど、頭の中はあの恐し

い疑惑かたまりの塊で一ぱいになつていたのでございます。私はやはり妻

を殺すために殺したのではなかったらうか。たとい梁はりに圧おされていても、万一命が助かるのを恐れて、打ち殺したのではなかったらうか。もしあのまま殺さないで置いたなら今の備後屋びんごやの女房の話のように、私の妻もどんな機会きゆうしで九死いっしょうに一生いっしょうを得たかも知れない。それを私は情なさけ無く、瓦の一撃で殺してしまった——そう思った時の私の苦しさは、ひとえに先生の御推察を仰ぐほかはございません。私はその苦しみの中で、せめてはN家との縁談を断つてでも、幾分一身きよを潔くしようと思つたのでございます。ところがいよいよその運びをつけると云う段になりますと、折角の私の決心は未練にもまた鈍り出しました。何しろ近々結婚式を挙げようと云う間際になって、突然破談にしたいと申すのでご

ざいますから、あの大地震の時に私が妻を殺害した顛末は元
 より、これまでの私の苦しい心中も一切打ち明けなければなりま
 すまい。それが小心な私には、いざと云う場合に立ち至ると、い
 かに自ら鞭撻しても、断行する勇気が出なかつたのでございます。
 私は何度となく腑甲斐ない私自身を責めました。が、徒に責める
 ばかりで、何一つ然るべき処置も取らない内に、残暑はまた朝
 寒に移り變つて、とうとう所謂華燭の典を挙げる日も、目
 前に迫つたではございませんか。

私はもうその頃には、だれとも滅多に口を利かないほど、沈み
 切つた人間になつて居りました。結婚を延期したらと注意した同
 僚も、一人や二人ではございません。医者に見て貰つたらと云う

忠告も、三度まで校長から受けました。が、当時の私にはそう云う親切な言葉の手前、外見だけでも健康を顧慮しようと云う気力さえすでになかったのでございます。と同時にまたその連中の心配を利用して、病気を口実に結婚を延期するのも、今となつては意気地いくじのない姑息手段こそくしゆだんとしか思われませんでした。しかも一方ではN家の主人などが、私の気鬱きうつの原因を独身生活の影響だとでも感違あやまいをしたのでございましょう。一日も早く結婚しろと頻しきりに主張しやうしますので、日こそ違ちがいますが二年前ぜんにあの大地震のあつた十月、いよいよ私はN家の本邸で結婚式を挙げる事になりました。連日の心労に憔悴しょうすいし切つた私が、花婿はなむこらしい紋服を着用して、いかめしく金屏風を立てめぐらした広間へ案内された時、ど

れほど私は今日こんにちの私を恥しく思ったでございましょう。私はまるで人目を偷ぬすんで、大罪悪を働こうとしている悪漢のような気が致しました。いや、ような気ではございません。実際私は殺人の罪悪をぬり隠して、N家の娘と資産とを一時盗もうと企てている人に非人んびにんなのでございます。私は顔が熱くなつて参りました。胸が苦しくなつて参りました。出来るならこの場で、私が妻を殺した一条を逐ちくいち一白状してしまいたい。——そんな気がまるで嵐のように、烈しく私の頭の中を駈けめぐり始めました。するとその時、私の着座している前の畳へ、夢のように白羽しろはぶたえ二重の足袋が現れました。続いて仄ほのかな波の空に松と鶴とが霞んでいる裾模様が見えました。それから錦きんらん欄の帯、はこせこの銀鎖、白襟と順を追つ

て、べつこう鼈甲のくしこうがい櫛笄が重そうに光っている高島田が眼にはいつた時、私はほとんど息がつまるほど、絶対絶命な恐怖に圧倒されて、思わず両手を畳へつくと、『私は人殺しです。極ごくじゆうあく重悪の罪人です』と、必死な声を挙げてしまいました。……

なかむらげんどう中村玄道はこう語り終ると、しばらくじつと私の顔を見つめていたが、やがて口もとに無理な微笑を浮べながら、

「その以後の事は申し上げるまでもございますまい。が、ただ一

つ御耳に入れて置きたいのは、当日限り私は狂人と云う名前を負わされて、憐むべき余生よせいを送らなければならなくなつた事でございます。果して私が狂人かどうか、そのような事は一切先生の御判断に御任かせ致しましょう。しかしたとい狂人でございましたも、私を狂人に致したものは、やはり我々人間の心の底に潜んでいる怪物のせいではございませんか。その怪物が居ります限り、今日私を狂人と嘲笑あざわらっている連中でさえ、明日はまた私と同様な狂人にならないものでもございません。——とまあ私は考えて居るのでございますが、いかがなものでございましょう。」

ランプは相不変私あいかわらずとこの無気味な客との間に、春寒い焰を動かしていた。私は楊柳觀音ようりゆうかんのんを後にしたまま、相手の指の一本

ないのさえ問い質ただして見る気力もなく、
黙然もくねんと坐っているより
ほかはなかった。

(大正八年六月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

疑惑

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>